
怪盗と刑事とその他諸々

美鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪盗と刑事とその他諸々

【Nコード】

N2724Y

【作者名】

美鈴

【あらすじ】

怪盗ファントムを中心に刑事や商人、その他諸々の方々が活躍する中世風異世界物語。

他サイトにて同時連載中！

怪盗な妻（前書き）

怪盗物が書きたくて書きたくて仕方なくて書いてしまった代物です。
軽く読める物になる予定。

怪盗な妻

今宵、ある資料館のベルがけたたましく鳴り響き、静かな資料館を多数の足音が聞こえてくる。

「ファントムが出たぞ！ “アランカルの王冠” が奪われたー！！」

“アランカルの王冠”。

遙か昔、海に沈んだと言われている古の王国アランカル。

栄華を極めたその王国にはかなりの金銀財宝が隠されていると言われており、沈んでいるとされている海域には今でも多くのハンターが金銀財宝目当てに彷徨っている。

そんなある日、資料館へと納められた“アランカルの王冠”は、拳程の大きなダイヤモンドを中央に埋め込まれ無数の宝石を散りばめられた王冠で、かの王国の王しか身に付けることが出来ないとされていたもの。

そんな歴史的にも貴重な品が、ある怪盗により盗まれた。

怪盗の名はファントム。

アランカルの財宝を幾度となく盗んでいる、最近巷で有名な怪盗である。

全身黒ずくめの厚手の服を纏い、顔に仮面を被っているため、この怪盗の性別は不明。

そんな怪盗は、今回も“アランカルの王冠”を奪取することに成功した。

「くそーっ！！また盗られたー！！！」

熱血警部の悔しい叫び声が静かな夜に響いた。

「ただいまー」

城下町の一角にあるマンションの2階に仕事疲れで帰ってきたのは、家主のアーリア。

「おー、おかえり。今日もお勤めご苦労さん」

「あなたもね」

リビングに入ると、服を着崩しセットした髪を無造作に掻き上げた状態で一服して寛ぐ男が一人。

名前はエドガー、アーリアの旦那さまである。

「今回も無事ターゲットを回収したみたいだな、後何個なんだ」

「リストによると…後5つみたいね」

古びた手帳を取り出して確認するアーリアの背後に回ったエドガー

は、右手で手帳を取り上げもう片方の手をアーリアの腹に回す。

「なら、頑張らないとな。そろそろ俺も限界なんだけど……」

腹に回った手が徐々に上へと上がっていき、アーリアの胸に当たるという所でアーリアの手に阻止される。

「それでいいから夫婦になれって言ったのはあんたでしょ？ じゃなきゃ、なんで刑事のあんたと夫婦になるのよ。…怪盗の私が」

実は彼女こそが巷を騒がせている怪盗のファントム。

そして彼はそのファントムを捕まえる側の刑事。

こんなあり得ない組み合わせが誕生したのは、エドガーが怪盗ファントム特別対策本部に配属されてすぐのことだった。

その日いつものようにファントムに扮したアーリアが仕事を終え刑事達から逃げている時、頭脳明晰であったエドガーが先回りをしてアーリアを捕まえた。

すったもんだの末逃げ出すことに成功したアーリアだったが、その時にエドガーに女だということがバレてしまった。

次の仕事の際に、またまた捕らえられたアーリアはエドガーに事情を話し、「手伝うから夫婦になれ、全てが集まるまで手は出さない」という理由で、この奇妙な夫婦の出来上がりである。

「それにしても、今日もエドの戦略にまんまと嵌まったわね。あの熱血警部」

「ああいう単純な奴は嵌めやすくて楽だ」

極悪人のような彼の笑顔に、アーリアは何故彼は刑事になったのか不思議に思った。

（敵ながら…哀れだわ、熱血警部…）

「さて、夕飯作ってある。さっさと食べて寝るぞ。夜更かしは美容の敵って言うしな」

「あんたが言うか」

エドガーが作った夕飯を二人で食べてお風呂に入り、ベットに潜り込む。

「…くつつきすぎ」

「ベット一つしかないし、狭いから仕方がない」

「~~~~っ、もう寝る!」

文句を言っても仕方がないと思ったアーリアは、頭まで毛布を被り寝てしまう。

そんなアーリアを見て優しく笑いながら、自分も目を閉じ眠りにつく。

（こうしていると、本当に普通の女だよな。…まったく、数奇な運命なこと）

目を閉じたエドガーは、アリーアとの出会いを夢に見る。

それは、エドガーにとって運命の出会いだった。

刑事な夫

エドガーは昔から何もかも器用にこなすことが出来た。

貴族の嫡子として生まれ期待を一身に背負い教育されてきたが、エドガーは家には興味がなく、すぐに生まれた弟に権利を渡すと家を出てしまう。

そして貴族としては珍しく刑事になる道を歩みだした。

何の後ろ楯もなくなるとなく進み続け、頭脳明晰で射撃の腕も一流なことから警察内でも期待されていた。

しかし出世に興味がなかったエドガーは、今巷で騒がれている怪盗ファントムに少し興味を持って自ら怪盗ファントム特別対策本部へと足を運んだ。

ただの怪盗だったなら興味どころか、存在自体どうでもいいと思っただことだろうが、このファントムはそんじょ其処らの怪盗とはまるで違った。

ほとんどの怪盗は派手好きで盗みを遊び感覚らしく、必ず警察と盗みに入る場所に向けて予告状を出すのだ。

しかし、ファントムは予告状を一切出さずに盗みをする。

故に発見が遅れて降り逃がしたり、いつ盗みに入るのかわからない為に無駄な人員を割いていた。

次に予告状を出さない為に呼び名などがなく、ファントムという名は闇に紛れ遂行することから、周りの人間が呼び出したことからついた名前だ。

あとはアランカルの物しか盗まず、それは宝石であり書物であり、果ては金にならないものまでにいたる。

そして今夜、エドガーが特別対策本部に配属して初めてファントムが動きを出したと通報があった。

「今夜こそあの憎き怪盗ファントムを捕らえるぞ！！心してかれ！！」

（心してかかれれば捕まえられるなんて本当に思ってたのか？）

熱血警部であるゴドーに呆れながら、今回のターゲットである博物館の侵入経路や退路できる場所は頭に入っているので、エドガーは一人でファントムが来るであろう退路へと向かった。

「そろそろか…」

博物館ではジリリリッとベルが鳴り、熱血警部の怒号と大量の足音が響いている。

そして、退路である非常ドアから一つの影が出てきた。

「やあ、怪盗ファントム」

「…っ！！？」

予想外だったのか一瞬動きが止まったのをエドガーは見逃さず、素

早く腕を掴み羽交い締めにして拘束する。

「予定になくてかなり驚いたみたいだな。前から気になってたんだが、やっぱりな」

「……………」

「俺らの動きが漏れてるんだな」

エドガーは不思議に思っていた。

確かに予告状を出さないからある程度の混乱を予想出来るが、それにしては見事に見つからず逃げ切っていた。

それはつまり此方の行動が筒抜けしていた証拠でもある。

どこでそんな情報を手に入れたのかは知らないが、エドガーに捕らわれているからもう知る必要はないだろう。

「少しは期待してたんだが…。お前も所詮はこの程度の人間か」

「……………」

「おまけに戦利品はただの羽ペンね。アランカルの商品としても、これになんの価値があるっていうんだ」

ファントムから取り上げたのは、王族が代々使っていたと言われている古びた羽ペン。

ただの羽ペンがアランカルの名前がついただけで価値が生まれただ

け。

「フン」

片手で軽く弄んでいると、ファントムが動く気配。

目を見張った瞬間に顎に衝撃が走り、腕が緩んだ隙にファントムが飛び出し羽ペンも取り返すことに成功した。

なんとファントムは頭をエドガーの顎に命中させたのだ。

「貴様…っ！」

「これに気安く触れるな！！お前達はこれの価値が解るまい！！」

「な……、女……？」

今まで沈黙していたファントムから発声されたのは確かに女性の声。それまでファントムは男だと当たり前に思っていたエドガーは、驚いて声が出なくなった。

「最後の最後で隙を作ったわね、刑事。あなたでは私を捕まえることは出来ないわ」

仮面に隠された顔が笑ったと同時に、ファントムはその場から立ち去る。

逃げるファントムの背中を呆然と見つめながら、エドガーは笑いが込み上げてきた。

「ハ…ハハハッ！…そうなくては面白くない！やはり面白い！怪盗ファントム！」

次に会った時こそ逃がしはしない、そう固く誓ったエドガーはまたファントムに逃げられて悔しそうにしている熱血警部の元へと戻った。

「ゴドー警部。お話があるのですが」

「……なんだね、エドガー君」

「ファントムの対策に、俺の頭脳を使ってみませんか？」

ただし、あれを捕まえるのは自分だけで十分だから、邪魔な警部達には俺の手の上で踊ってもらう。

など思っていることなど、熱血警部が解るわけもなく、本部で期待されている逸材からの助力に感謝するのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2724y/>

怪盗と刑事とその他諸々

2011年11月14日13時51分発行